慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「国民道徳論」の形成に及ぼした儒学の影響に関する研究 : 井上哲次郎の儒学観と教育思想をめぐって
Sub Title	
Author	江島, 顕一(Eshima, Kenichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007.) ,p.154- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000064-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

参考文献

Angola Maconde, Juan, 2003 [1999], *Raíces de un pueblo: Cultura afroboliviana*, Producciones CIMA, La Paz.
Durán Vacaflor, Eva, 1996, *Ahora no es tiempo de la esclavitud: La saya*, UMSA (Tesis de grado: Literatura), La Paz.
Geertz, Clifford, 1973, *The interpretation of cultures: Selected essays*, Basic Books, New York. (＝1987, 吉田禎吾ほか訳,『文化の解釈学 I』岩波書店.)
Rey, Mónica, 1998, *La saya como medio de comunicación y expresión cultural en la comunidad afroboliviana*, UMSA (Tesis de grado: Comunicación social), La Paz.
Sánchez C., Wálter (ed.), 1998, *Tambor mayor: Música y cantos de las comunidades negras de Bolivia*, Centro Pedagógico y Cultural Simón I. Patiño, La Paz.
川田順造, 2001 [1976],『無文字社会の歴史』岩波書店.
清水透, 2006,「フィールドワークと歴史学」『歴史学研究』No. 811.

「国民道徳論」の形成に及ぼした儒学の影響に関する研究
――井上哲次郎の儒学観と教育思想をめぐって――

江　島　顕　一

本研究の概要

本研究の目的は,「国民道徳論」の形成に及ぼした儒学の影響を究明することである。この課題にこたえるため, 平成 18 年度は,「国民道徳論」の中心的な唱道者のひとりであり, 明治の哲学会, 教育界に厳然たる勢力を持って君臨した人物である井上哲次郎に着目し, 彼の儒学観及び教育思想（とりわけ徳育観）を分析する研究に取り組んだ。

はじめに

近代日本思想史上において,「国民道徳論」なるものが直接的に論じられるようになったのは明治末年であったといわれるが, その提唱者であった井上については, わが国にドイツ観念論哲学を移植することに尽力した「日本型観念論哲学の確立者」として, また所謂「教育と宗教の衝突」論争における「教育勅語」の「公定解説者」として等, その思想は様々な視座から論じられてきた。こうした多岐に渡る活動の中で, 井上が儒学を対象とした研究・言論活動に関しては, これまで主に明治三十年代に刊行された儒学三部作に研究関心は向けられ, その内容分析や日本儒学における位置づけ等を中心とした論及がなされてきたが, 井上の儒学理解・認識については, 必ずしも明らかになっているわけではない。

本稿では, 井上が儒学に対し, そこに見出される有用性について,「国民道徳」を養成する徳育との関連で語った論考の分析を行い明らかとなった井上の儒学観の要約を示すこととする。

井上の儒学観—徳育観との関連で—

(1)　儒学の「内容」と「形式」

井上は,「教育と宗教との衝突」論争で積極的な言論活動を行っていた明治二十年代から，明治三十年代に入るとその主たる関心は日本儒学の研究に向けられ次第に本格化していく。その成果は，1900（明治33）年の『日本陽明学派之哲学』，1902（明治35）年の『日本古学派之哲学』，1905（明治38）年の『日本朱子学派之哲学』となって順次出版された。

さらに井上は，1908（明治41）年10月25日に行われた哲学会において，日清戦争を契機として日露戦争を経てさらに興隆をみせていた漢学・儒学の意義を再強調する風潮を背景に，それまでの儒学研究を踏まえた形で「儒教の長処短処」と題する講演を行う。

本公演は,「近来儒教復活論を唱へる人が往々有りまするからして其儒教といふものは何う云うものであるか」を自らの立場から論じたものである。そこで井上はまず，そもそも「儒教」とは何かについて，自らの定義を明示する。井上よれば,「儒教」とは「主として孔子に依って建設」された「支那の古来から発達して来た徳教」であるという。そして,『論語』,『大学』,『中庸』,『孟子』の「四つの書物が原始儒教の真面目を存して居る」と評価している。

このような前置きをしながら，井上は儒学の長所・短所を列挙し，自らの儒学観を端的に語っているのであるが，着目すべきは，長所・短所を持ち合わす儒学を井上が今後どのように考えていけばよいのかについて論じている部分である。というのも，そこには井上が儒学に見出す今日的意義がどこにあり，そしてそれを今後どう応用していくのかという，長所・短所の指摘に留まらないさらに一歩進んだ言及がなされているからである。

まず井上は，儒学を「畢竟共産物，徳教として孔子を始め支那の智者の唱へた共産物」とみなしている。それゆえその内容は，時代の変遷とともに変容してきたとする理解から，井上は儒学をその内容と形式の二つに区別して捉える必要があると説く。すなわち，儒学の内容についてみれば，そこには変化を認めぬわけにはいかない部分や欠点を免れない点があることを指摘し，それは時代の変化によって変容するものであり，その時勢に合うように改変可能なものであると論じる。一方，儒学の形式というものは，今後も変わらずに生き残って存続していくと述べ，その理由は儒学の形式には「荒誕無稽の元素がない。迷信がない。儒教は当然の世間的道徳でやつて」きたからだと論じる。そして，儒学の形式というものは,「教育勅語」にも採用されており，その意味では，儒学の形式は不変であり且つ徳教を成立させる根拠となるものであるが，内容については変更があっても差し支えないとの見解を示す。なぜなら，今日の時勢に適合するように徳教を立てることは，徳教の祖師たる孔子の精神に相反することではないからだという。

このように井上は，儒学に対し，それを内容と形式の二つに分けて捉える視点を提示し，そこから儒学に今日的意義を見出し，応用の可能性があることを論じた。

(2)　儒学応用の論理

井上は，1909（明治42）年7月,『丁酉倫理会倫理講演集』に発表した「孝道観念の変遷に就いて」において，儒学の内容は修正が加えられても差し支えないという言及に関して，具体的に「孝」の概念を取り上げて説明した。

冒頭井上まず，社会万事の事柄の中には，その名称を変えずとも，その内容は時勢とともに変化して

いくものがあると語る。そして孝という概念はその事例に当て嵌まるものだという。井上の解釈によれば，元来孝とは，およそ父母に敬愛を尽くすという意味のものである。しかし，その実行の方法に関しては，『礼記』にあるように本来厳重な方式に則って行われるものであり，『論語』における孝についても，今日的な観点からすれば，厳密な実施には困難な点が多々あると説く。そこで井上は，儒学のこうした形式的な側面に拘泥する必要は必ずしも無いと述べ，むしろ実行の仕方や内容は時代に合わせて変えるべきものであると論じる。但し，道徳は家庭を出発点として実践していくという孝の精神，そして一家の中において父母に孝を尽くすことを推し広げて行くと，人道というより広汎な道徳へと繋がっていくという考え方は，大いに尊重し継承すべきであると強調する。

さらに井上は，孝とは広義に解釈すれば「宇宙根本の原理」として捉えることも可能である広大な概念ではあるが，その中には時勢の進歩にしたがって変更しなければならない部分があると付言しつつ，今後はこうした東洋の道徳思想の性格を保持する一方，西洋の思想を取り入れながら，両者を融合・調和して，道徳思想を発展させていかなければならないと語っている。

このように井上は，儒学における孝の概念を取り出し，具体的な内容や実行の方法等は，その時代に適当なものに修正されるものであり，またすべきものであると考えていた。逆に言えば，そうした改変がなされることによって，儒学はその命脈を保持することが可能となることを示唆していたといえよう。

(3)　儒学と徳育

ところで，井上が徳育の基礎に儒学を据えようと試みるのは，明治二十年代に展開されたいわゆる「教育と宗教の衝突」論争以来一貫して力説してきた，教育への宗教の介入に反対する一連の流れも影響していた。

井上は，1910（明治 43）年 7 月に『教育と修養』を刊行し，「今後の徳育方針」と題する一節において文字通りわが国の今後の徳育の方針について宗教との関連で叙述している。

井上は，昨今キリスト教や仏教といった宗教を根底として，あるいは個人主義や社会主義に基いて徳育を行うことが最適であるという論者に対し，その論旨はいずれも適当ではないと批判する。殊に宗教に関しては，「我国の徳育を仏教や基督教の如き歴史的宗教に委ねると云ふことは決して今後の方針として其当を得たるものとは考へない」と断じている。その最大の理由として，宗教は科学と相容れないからであるといい，特定の宗教を「国民教育」の機関である諸学校に採り入れることはできないと主張する。

そこで井上は，今後の徳育方針は，一般普遍の真理に基づいたものであると同時に，自然科学と矛盾しないものでなければならないとの方針を打ち出す。そして，宗教を離れた徳育が有益であることは，儒学が歴史的に証明していると指摘し，それは儒者たちの人格及びその事跡を振り返れば容易に了解されることであると論じる。一方，今日「儒教復活」が叫ばれているが，現今の激変する社会状況に照らし合わせると，嘗ての儒学の内容そのままを徳育に用いようとするのでは不十分であると述べる。しかし，儒学の一切の迷信を離れ，純然たる世間的な道徳を説き，それに依って徳教を立てていく精神は，徳育にとって非常に有益な性格であると自説を展開するのであった。

このように井上の中で儒学は，ある意味教育への宗教の干渉・介入に対する対抗思想として位置付けられていた。様々な思想，主義，宗教の負の要素が，教育へ流入することを危険視する態度を一貫して

有していたといえる。井上のいう宗教の負の要素を含まず，日常生活を範疇とし，科学とも悖らない世間的な道徳を主眼とする儒学の性格に，井上は今後の徳育を構想していく上での有用性をみていたのである。

おわりに

以上のように，井上は「儒教復活論」興隆の影響もある中で，自らの儒学理解・認識を示していたが，井上にとって儒学は捉えようによっては今後とも有用な教義として理解され，その有用性は徳育と強い結び付きをもって認識されていたといえよう。これ以降井上が「国民道徳論」を語っていく中で，井上の儒学観でとりわけ注目しておきたいのは，儒学は時代の変化によってその内容は修正される，あるいはすべきものであると考えていた点である。というのも，具体的な検討については次稿以降での課題となるが，儒学をその時々の時勢を鑑みて再解釈し，その時代に相応しい内容に改変可能であるとする井上の論理は，実際彼の「国民道徳論」において援用されていくものだからである。

本年度の研究では，井上の儒学理解・認識について徳育との関連で考察を進めてきたが，ここで明らかとなった井上の儒学観が，自らの「国民道徳論」において，具体的にどのように反映し，応用されていったのかについては，今後の課題として稿を改めて論ずることとしたい。

* 幅の都合上，本稿では引用の出典を明らかにするにとどめ，注記は省略した。

拒否に対する感受性とストレスコーピングとの関係の検討

小　川　　万理子

拒否に対する感受性とは，他者から拒否されると不安を伴って予期し，また拒否をすぐに知覚して過剰反応しやすい傾性をさす (Downey & Feldman, 1996)。Downey & Feldman (1996) は拒否についての予期とそれに伴う不安・懸念が拒否に対する感受性の中核だとし，これらを測定する Rejection Sensitivity Questionnaire (RSQ) を開発した。すなわち，両親・友人・恋人といった他者から拒否されると予期しやすく，なおかつそれについて不安を強く感じやすいほど拒否に対する感受性が高いとみなされる。それ以降の研究により，対人関係においてストレスフルなイベント（対人ストレッサー）を経験した際，拒否に対する感受性がより高い者ほど健康が害されやすいことが示唆されている（小川，2004)。

この拒否に対する感受性の高い者の示す傾向には，彼らが対人ストレッサーにどう対処しているか，すなわちコーピングの問題が関わっている可能性が報告されている（小川，2005)。しかしながら，個人の傾性に加えてストレッサーの性質の影響も検討した研究では，個人傾性とコーピングとの関連がストレッサーの性質によって異なることがあるとされている (e.g., O'Brien & DeLongis, 1996)。これを踏まえ，拒否に対する感受性と対人ストレッサーへのコーピングの選択との関連が相手との親密性および重